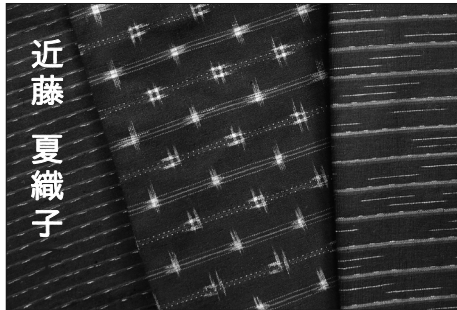


連載第39回

宝物は足下に



近藤夏織子

今、世界史上、もっとも希少な文明が減びようとしています。私たちが暮らす、この島国で。まるで何もなかったかのように、密やかに。

明治維新以降、この国の主な教育現場では、すべての歴史は一部の権力者が作り上げたと教え込まれ、大多数の庶民の暮らしは取り上げられることすらありませんでした。学ぶべきことはすべて海外にあると教育され、海外留学や海外の先住民との接触は、若者たちにとって最高の名誉とされる一方で、江戸時代後期を頂点とした高度に洗練された生活文化を隠蔽。自給自足を基本とした衣食住・農林漁業の技術、エネルギー循環システム、工芸・芸術・音楽、祭祀。多智慧の多くは庶民の暮らしの中から生まれ、育まれてきたものでした。しかし今、その大部分は忘れ去られ、一部、上流階級の目に叶うものだけが、贅沢品として使用したり鑑賞するためのものに変化していきました。それ以外の古民具類は、博物館や資料館のガラスケース越しに眺めるものとなり、簡単な説明文だけでは、ほとんど理解することができない代物として、ただ陳列されています。自然素材を巧みに加工したその道具類の作り方を学ぶことは、年々、不可能となりつつあり、すでに多くの道具類は見ることすらできなくなっています。方や、欧米から「パークマカルチャー」を学んだ若者が講師となったワークショップでは、ホームセンターで購入した材料

がよく使われていますが、疑問を持つ人はほとんどいません。

多くの人は、無視こそが最大の破壊行為ということに、なかなか気がつくことができません。目に見える破壊の前に、「なかったことにする」という精神的な破壊があり、次に現実が破壊されていきます。しかし、精神的破壊が先行していると、その現実的な破壊にも気づくことができないのです。

粟 161 種、稗 75 種、大麦 143 種、小麦 65 種、大豆 129 種、蕎麦と大根 21 種、里芋 24 種。江戸時代、享保・元文年間の産物書上に記された尾張国の畑作物は、驚異的な数に上ります。同種異名を含むとしても、地球上で、これほど多様な自家採取が行われた地域は、他にありませんか。しかし今、そのほとんどが廃絶され、特に米以外の穀類や豆類、油類は、多くを海外輸入に依存しています。

また現在、手織りの布は最高の贅沢品で、限られた産地の職人や専門家のみが織ることが出来ます。しかし昨年、隣の集落の古老が昔、織ったという布類を拝見しましたが、深みのある藍色に、驚くべき細かな緋と縞が組み合わさった、実に見事な反物でした。当地は織物の産地ではなく、その古老も無名の百姓として生きてこられた女性。他の多くの女性と同じように、ただ家族の衣服のために、染め、織られた一点物の数々。藍の深さは、愛の深さだったのです。

私は、無名の古老からの聞き取りを 10 年以上続けていますが、驚くべき話が多く、同じ分野の聞き取りを何度重ねても、未だに新発見が常にあります。周囲からは、ただの個人的趣味とみなされてきましたが、昨年あたりから自分の中で「もう黙ってはいられない」という思いが強くなり、やがて「黙ってはいけない」という思いに変わってきました。この島国の先人は、ネイティブ・アメリカンのように格言を残さず、外に対してはあまりにも寡黙に日々の営みを紡いできました。地域に根ざした家族的な心の交流によってのみ強かに伝えられてきた智慧は、今、人間関係の希薄化と時代の流れによって、なかったかのように跡形もなく消え去ろうとしています。

読者の皆様にお伺いしたいことがあります。皆様は、今、自分が暮らしている大地をどれほど愛し、知ろうとされていますか。昨年、私はその質問を、やむにやまれぬ思いで本気で周囲に尋ねてみました。すると、意外なまでに「実はもっと知りたかった」という声が出てきたのです。宮本常一のように、日本全国を徒歩で旅して忘れ去られた古老たちの話の聞き取りをしてみたい。でも、経済的にも立場的にも、子供のいる私には到底、できないことです。しかし、手分けできる仲間がいれば、希望の旅を始めることができるのではないだろうか。そう確信できた昨年末、「大和高原民俗文化研究団」を立ち上げました。

私が暮らす大和高原は、奈良県東部の高原地域で、明確な境界はありません。

中世の文献に記されたように、奈良盆地から見て東山内、東山中、山内と呼ばれた地域とする場合、おおそ東は名張川、西は三笠山から三輪山、北は笠置川・木津川、南は国道 165 号線付近が範囲。自治体としては、奈良市・天理市・桜井市の東部、山辺郡山添村、宇陀市室生の中北部あたり。希に、宇陀市中南部、奥宇陀（曾爾村、御杖村）を含めるケースもあり、正確な定義はありません。ただ共通して言えるのは、奈良盆地や吉野地域とは微妙に異なる、里山の風土から生まれた生活文化を共有していること。隣接する三重県や京都府側にも、類似の生活文化はさらに広がっていて、風土と人のおおらかな関わりを伝えてくれます。

この豊かな自然のなか、大和高原の先人達は多岐にわたる分野の智慧、技術、心を育み、伝えてくださいました。しかし世界大戦と高度経済成長期を経て、今、その貴重な文明は静かに姿を消そうとしています。わずかに保存された祭祀や芸能、古民具の背景には、どのような生活、どのような思いが広がっていたのでしょうか。しかし、その体験者の方々への聞き取りも、年々、難しくなっているのが現状です。やがて、断片的な遺物をガラス越しに眺めるだけになってしまうのでしょうか。

私たち大和高原民俗文化研究団の目的は、先人の営みと智慧を学び、伝え、活かし、次の世代につなげること。各集落や家庭に伝えられてきた幅広い分野の生活文化の「聞き取り」を活動の基本とし、さらに記録、調査、研究、実践を行います。長きにわたって生活文化を継承されてきた地域の方々、先人の方々に深い敬意と感謝を表し、心通う交流と地域貢献を目指します。また、大和高原から離れた地域との比較研究を行い、「聞き取り」活動の普及を図ります。庶民の文化を、専門家ではなく、庶民の手から手へとつないでいくことこそ、継承の本流です。世代を超えた直接的な交流体験となる「聞き取り」。体験者の高齢化によって、あと何年できるかわかりませんが、後年、まっとその体験は人生の宝物となるはず。私の人生を変えた体験も、10 年あまり前、今は亡き無名の古老との対話から始まったのです。

今ならまだ、間に合います。目立たぬところで懸命に生命を伝えてくださった、無数の無名の先人の方々。「生きま」ことに真剣に向き合ってきた先人に敬意と感謝を表し、その心を学び、自らを振り返りたい。本来、智慧とは、一人一人の「生き様」そのものであり、本当は、言葉にできないところにその心が込められています。名も無き無数の先人たちが、慈しみ尽くした大地を見直し、時空を超えて、智慧と心をつなげていきましょう。私たちは、時空を超えてこそ強くなれる。覚えておきましょう。